

「渋沢フィルム」撮影地の景観変貌

—韓国・蔚山を事例として—

浜田 弘明

HAMADA Hiroaki

(COE教員)

はじめに

神奈川大学21世紀COEプログラム第3班は、「環境と景観の体系化と資料化」を研究テーマとし、筆者の所属するグループでは、1930年代の生活記録写真や映像を活用しての「景観」の分析や時系列的な研究（香月 2003：11-12）を進めている。この写真や映像は、神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵する、通称「渋沢フィルム」と呼ばれているもので、研究対象とすべき写真資料は約4,000点にのぼる。これらの写真は、カード化されてはいるものの、「資料点数が膨大であること、写真資料をテキストとした学術的なリテラシーの手法が開発されていない」（八久保・須山 2004：109）などの事情により、十分な活用が成されていないのが実情である。そこで筆者らは、「渋沢フィルム」の活用方策の確立に向けて、取りあえず人文地理学的観点から、歴史的景観写真の読み解き方の考察を試みているものである。

「渋沢フィルム」は、その名の通り、財界人としても知られる民俗学者の渋沢敬三とその同人が昭和初期に撮影したもので、撮影地域は日本国内に止まらず、当時、植民地支配をしていた中国南部・台湾・朝鮮半島にまで及び、写真は全118巻のアルバムに収められている。これらの写真の中から、一昨年度は南西諸島の奄美大島の写真67枚について現地調査を実施し報告がなされている（八久保・須山 2004：105-125）。また、昨年度は朝鮮半島の写真235枚について目録化し、多島海と蔚山（ウルサン）を中心に現地調査を実施し報告を行った（浜田 2004：74-93；浜田・八久保 2004：127-159）。朝鮮半島で撮影された写真の中で、この2地域のものが最も多く、慶尚南道の蔚山邑達里（現在の蔚山広域市南区達洞）が120枚、それに次ぐ全羅南道の多島海地域が58枚となっている。

昨年度、多島海地域については新旧の景観分析を試みたが（浜田 2004：74-93）、蔚山邑達里については、あまりにも変貌が著しかったため、景観の現状分析を試みるに止まった（浜田・八久保 2004：127-159）。そこで今年度、再度、韓国の蔚山を訪ずれ、新旧の景観分析を試みるための資料収集に努めた。なお、現地調査においては昨年同様、235枚の写真の中から、撮影地が「里」まで記録され、かつ景観を主体としたもののみを選び出し、撮影地の比定を行った。今回の現地調査も、決して十分なものとは言えなかったが、2005年8月16日から23日までの7泊8日の日程で、蔚山・慶州・群山の3地域を中心に、各2泊3日程度の日程で資料収集と確認作業を実施した。

本稿では、韓国の中でも最も景観が激変している蔚山における、「渋沢フィルム」以後70年間の景観要素の変化等について、人文地理学の視点から分析を試みることにしたい。

I 朝鮮半島の「渋沢フィルム」

1 「渋沢フィルム」の景観写真

渋沢敬三は民俗学者であるということから、「渋沢フィルム」の主題は景観よりも、むしろ暮らしや人物、民具・農具などに重きが置かれ、背後に写る風景や景観はかなり限定された範囲のものが多く、撮影地点が特定出来るものは少ない。今回調査対象とした写真については、約3割のものは周囲の風景や景観をほとんど読み取ることはできない、人物や道具を主体とするものである。

朝鮮半島で撮影された「渋沢フィルム」は、アルバム12冊にわたり、対象となる巻数は、第55～66巻及び第120巻の計13冊である。多くの写真には撮影年代が記されていないが、第55巻に「昭和8年12月」（1933年）の記録が、第120巻には「昭和11年8月」（1936年）の記録があることから、概ねこの間に撮影されたものと推察される。

最も多い撮影地は、慶尚南道の蔚山邑達里で、第57巻・59～63巻・120巻の大半を占め、枚数は120枚にのぼり、第60巻のアルバムには「慶尚南道蔚山邑達里」の記載があり、第120巻のアルバムは「朝鮮達里写真集」と題されている。しかし、蔚山の景観変貌はあまりに甚しく、撮影地点の確定は現在となつては極めて困難となっている。蔚山の達里地区は1980年代以降、土地区画整理の実施により急激な都市化が進み、渋沢らが訪れた時代、農村だった蔚山邑達里は、現在、蔚山広域市の新都心へと変貌している。

次いで多い撮影地は、全羅南道の多島海地域で、第58巻・63～66巻に計58枚が収められている。多島海で撮影されている島々は、上落月島・下落月島・荏子島・水島・前曾島・大許沙島・小許沙島・扶南群島などである。多島海地域の一部の島は浅瀬が埋め立てられ、半東部と繋がったところもあるが、多くの島は、まだ開発のあおりを受けずに、かつての景観が比較的良好に保たれている。このほかに、撮影地として確認されるのは、慶州、大同郡、京城府（ソウル）、木浦港などである。アルバムには、上記のような撮影場所のほか、撮影者や簡単な説明が付されているものもある。なお、詳細については、本『年報』2号を参照願いたい（浜田 2004：76-82）。

改めて「渋沢フィルム」の撮影地点比定のための手順を述べておくと、いくつかの段階を経て行う必要がある。①都市・集落といった比較的マクロなスケールでの場所の特定、②撮影対象となった場所における「固定点」の特定、③写真を撮影した撮影地点の特定、④撮影地点から撮影対象への方角の特定という4段階の作業を進めた（八久保・須山 2004：111）。今回の調査においても、①の作業は、現地1：25,000及び1：5,000地形図によって現在の集落名の確認を行い、②についても地形の起伏や目標物等を写真と地形図と照らし合わせながら検討した。③④の作業については、現地を歩きながら景観変化の少ない山並みや川の流れなど参考に特定していったが、高層ビルに囲まれている地点が多く、地上からの確認が困難であるため、許可を得て、撮影地点に最も近いと思われるビルの屋上に登らせてもらい、作業を行ったものもある。

「渋沢フィルム」の撮影地点の比定は、決して容易な作業ではなく、今回調査対象とした写真についても、撮影場所は「里」つまり村（若しくは「字」）レベルまで記録されているのがせいぜいで、ただ「朝鮮」とのみ記されているものもある。この程度の情報より、撮影地点を現地で比定することは非常に困難を伴った。また、他の写真との比較や現地確認の結果、明らかに撮影場所が誤って記さ

れていると見られるものや、地名の誤記と見られるものも散見された。つまり、写真のキャプションをそのまま信用することは危険であり、一方で、このような不備いかに克服するかが利用に当たっての課題でもある。

2 昭和初期における蔚山の景観

一昨年度の奄美大島での分析事例から、「渋沢フィルム」の景観写真は、フィルムそのものが有する景観に関する情報分析と、現在の写真との比較という2側面から分析が可能であるとしている（八久保・須山 2004：125）。

まずここでは、蔚山の「渋沢フィルム」景観写真そのものが有する景観に関する情報分析試みることにしたい。写真1は、「昭和十一年八月 朝鮮達里写真集 大豆畑の除草」とキャプションがついているものである。これを見ると、1936（昭和11）年当時の達里は純農村で、微高地の畑には大豆が栽培され、低地の水田には米が栽培されていた様子が窺える。また、農家は田畑の中に点在していることも分かる。

当時の蔚山付近の地形や土地利用については、戦前の1914（大正3）年に陸地測量部が測量した1:50,000地形図「蔚山」（図1）から知ることができる。渋沢らが蔚山を訪れる20年ほど前に作成されたものであるが、恐らくこの間の景観はそう大きくは変わっていないものと思われる。図1の地形図を見ると、中央部を蔚山湾に注ぐ太和江（テーファーカン）が流れ、その両岸に沖積低地が開け、水田となっている様子が分かる。「達里」は三角矢印位置の集落「達洞（タルドン）」であり、水田中の微耕地に立地している様子が窺える。太和江の北側に「蔚山」の古くからの市街地があり、蔚山の北西方向には城壁で囲まれた「兵営（ピョンヨン）」の集落が見える。蔚山の旧市街地には、現在も



写真1 達里の大豆畑（日本常民文化研究所所蔵：SA3867）

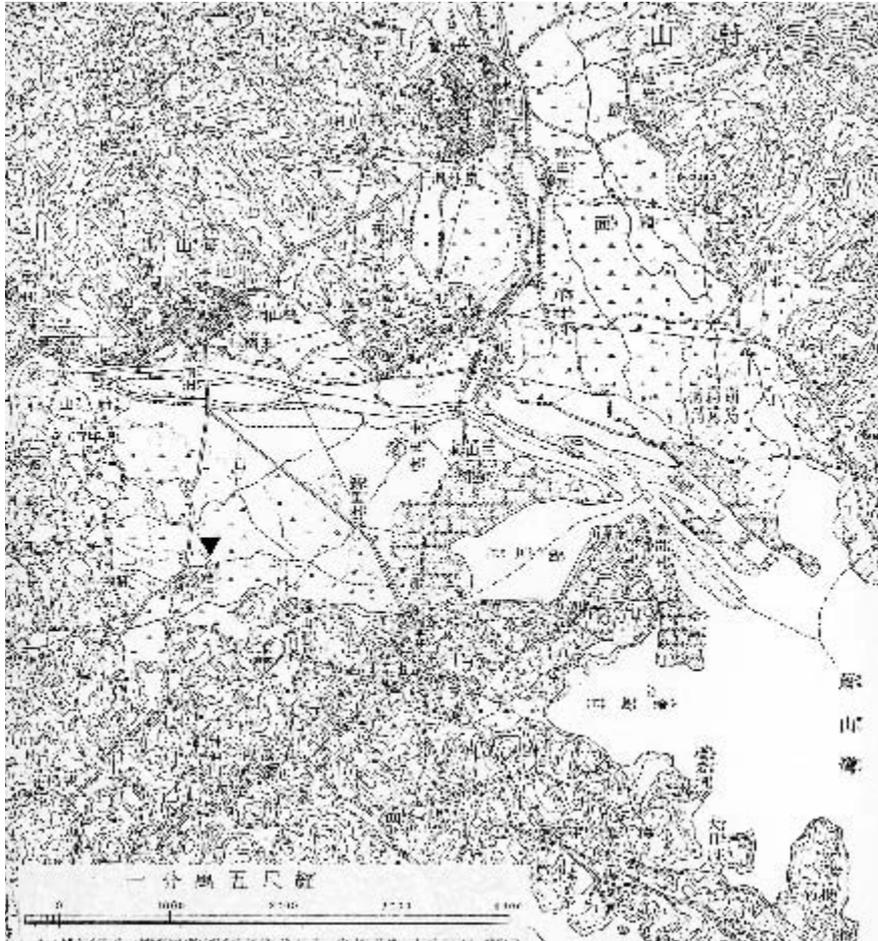


図1 1914（大正3）年陸地測量部測量1:50,000地形図「蔚山」（部分）

低層の小さな商店が立ち並び、露店も散見される（写真2）。また、兵営には今でも、城壁が歴史遺産として保護・保存され、目にすることができる（写真3）。

地形図作成とほぼ同時期の1917（大正6）年に、蔚山郡から『蔚山案内』（長岡編 1916）が発行されている。これによれば、1916（大正5）年末の旧市街（府内）の人口は1万1,034人で、このうち日本人（内地人）は540人となっている。また、蔚山郡全体では「農牧林業」人口が87%を占めていて、全くの農村であったことが分かる。重要農産物では、作付け面積・収穫高ともに粳米が最も多く、次いで多いのが大麦、写真1に写っている大豆は第3位の作付け面積となっている。この統計からも、戦前期の蔚山の土地利用景観は、水田と麦畑・大豆畑が広がっていたことが確認される。



写真2 蔚山旧市街地の商店街（2005.8.17筆者撮影）



写真3 兵営の城壁跡（2005.8.18筆者撮影）

II 蔚山の立地と都市化

1 蔚山の立地と沿革

ここではまず、蔚山市の景観変貌の要因を探るため、同市から刊行されている『蔚山市史』（蔚山市文化広報担当官室編 1987）、『蔚山広域市史』（蔚山広域市史編纂委員会編 2002）、『蔚山近代文化遺産目録』（蔚山大学都市・建築研究所編 2003）、などの資料をもとに、蔚山の立地・沿革及び都市化と都市計画について概観することとしたい。

蔚山は、釜山の北東約50km、慶州の南東約35kmに所在し、地形的には、朝鮮半島東南部の太白山脈南方に位置する。三方を平均高度100m内外の丘陵に囲まれ、東には蔚山湾を臨む。地域の中央部には太和江が流れ、その両岸には沖積低地が開けている。周囲を低山に囲まれ、平野が比較的発達し、また海岸に接していることから、有史以来、人間の居住に適していた。歴史上に現われた蔚山地域を概観すると、古代（新羅時代）には、慶州文化圏の一部を成し、蔚山湾と西部慶南をつなぐ要衝地としての役割を果たしていた。また、中世（朝鮮時代）以降は、鶴城・蔚州・蔚山などと呼ばれ、軍事的要衝地としての役割を果たし、今日に伝わる兵營城の遺構はその一つである。このように蔚山は、古代から近世まで、軍事的要衝地及び交易の中心地として機能した地域であった。近代の日本統治下においては、日本の軍事基地として蔚山飛行場が建設され、蔚山港では築港事業が進められた。また、1935（昭和10）年には、釜山と慶州を結ぶ鉄道が開通している。

第二次世界大戦終結後は、朴正熙（パクジョンヒ）政権の経済開発政策によって地域は一新し、1960年代の蔚山工業センター建設をきっかけに、重化学工業化が進展した。現在の蔚山湾沿いは、石油化学工業団地（写真4）、温山国家産業団地、龍淵重工業団地、現代重工業などが立ち並ぶ工業地帯となっている。

行政的には、1931年11月1日に蔚山面は邑に昇格し、その後、1962年6月1日に蔚山特定工業地区として指定された地域が蔚山市に昇格し、残り13の面は蔚州郡に改称された。市制施行時の人口は、85,082人であった。以後、人口は1970年に15.9万人、1980年に41.9万人、1990年には68.2万人と急増した。行政区は若干の変動はあったが、蔚山市と蔚山郡の行政区域が続いてきた。そして1995年、蔚山の市・郡を統合して蔚山郡を蔚州区に改編し、さらに1997年7月、蔚山広域市に昇格し、蔚州区は再び蔚州郡に復郡し現在に至っている。2000年には人口が101.4万人に達した。現在の行政区域は、1つの郡（蔚州）と4つの区（中区・南区・東区・北区）のほか、4つの邑、46の洞になっていて、さらに1,089の通、310の里、8,780の班がある。2004年現在の人口は107.8万人、面積は1,056.6km²となっている。

2 蔚山の都市化と都市計画

1944年、日本の朝鮮築港株式会社は、立地条件が良好な蔚山に、石油化学工業団地を建設する目的で、人口50万の工業都市建設のための都市計画を立てている。この計画の一環として、当時、北朝鮮にあった精油工場を、1944年に現在の市内の位置に移設している。しかし、日本の敗戦とともにこの都市計画は霧散したが、第二次世界大戦終結後も、新政府樹立までの米軍政期下においても引き続き、総督府が制定した市街地計画令がそのまま適用されていた。その後の1962年以降の、蔚山における主



写真4 蔚山湾の石油化学工業団地 (2005. 8.18筆者撮影)



写真5 現在の達里交差点付近 (2005. 8.17筆者撮影)

表1 蔚山都市計画の沿革

告示庁	告示番号	告示年月日	内 容
国土建設庁	149号	1962年 5 月14日	最初、蔚山都市計画を決定 (計画区域176.04km ² , 計画人口50万)
建設部	152号	1970年 3 月30日	蔚山都市計画 1 次再整備 (計画区域176.04km ²)
建設部	272号	1974年 8 月14日	蔚山都市計画の決定告示 (2 次再整備)
建設部	25号	1975年 2 月19日	蔚山都市計画 3 次再整備計画決定 (計画区域439.312km ² , 計画人口100万)
建設部	37号	1976年 3 月27日	農地保全のために蔚山都市計画の再整備計画 (計画区域439.762km ²)
建設部	都市計画課	1986年 5 月14日	蔚山都市基本計画の承認 (計画区域496.762km ² , 計画人口100万)
建設部	366号	1986年 8 月19日	蔚山都市計画 5 次再整備計画 (計画区域496.762km ²)
慶尚南道	43号	1994年 3 月 3 日	蔚山都市計画 6 次再整備決定
建設交通部	都市計画課	1997年 7 月11日	2016年蔚山都市基本計画承認 (計画区域1,143.110km ² , 計画人口150万)
蔚山広域市	82号	1998年 5 月11日	蔚山都市計画再整備決定 1 次
蔚山広域市	33号	2000年 3 月 4 日	蔚山都市計画再整備決定 2 次 既存の面級都市計画区域 5 カ所廃止および統合

(出典) 蔚山大学都市・建築研究所編 (2003) 『蔚山近代文化遺産目録』蔚山広域市

要な都市計画の沿革は表1の通りである。

1950年に朝鮮戦争が勃発したが、蔚山にはそれほど大きな被害はなかった。このため、戦後復興のためのマスタープランとしての都市計画事業は、蔚山では計画されなかった。しかし、1960年代になって、工業発展を中心とした経済開発5ヶ年計画を立案し、その実行に着手することになった。この最中、1962年1月の政府閣議で蔚山に工業センターを設置する決議がなされた。同年、蔚山開発委員会及び蔚山開発本部が設置され、国の建設部傘下に蔚山特別建設局が設置された。以後、1962年から、工場立地のための各種支援施設を建設することになった。このような工業建設と都市開発のためのマスタープランとして、1962年5月14日に計画区域176.04km²、計画人口50万人の「蔚山都市計画」が初めて決定し告示された。この当時、蔚山市の人口は8.5万人であった。

1970年3月30日に「第1次蔚山都市再整備計画」が告示、以降、1973年には蔚州郡の一带に設定された開発制限区域が蔚山都市計画区域に編入され、都市計画の区域面積は437.4km²に拡張された。1974年8月に「第2次蔚山都市再整備計画」が、また1975年2月には都市成長による都市の均衡開発のため、土地利用計画・交通計画・各種施設計画を含む「第3次蔚山都市再整備計画」が決定され、計画区域439.312km²、計画人口100万人とされた。

1976年には、農地保全のため「第4次蔚山都市再整備計画」が決定され、以後も1980～82年の間、3回にわたり公有水面編入などのために都市計画の一部が変更されている。1981年12月、政府は第2次国土総合開発計画を公布すると同時に、地域別の長期都市計画の指標を樹立するように指示し、1982年を基準年度として1991年を目標年度に定め、都市再整備計画の上位計画となる初の「蔚山都市基本計画」を立案した。その後、1986年5月に建設部の承認を得て、同年8月に建設部から告示決定された。以降、蔚山は都市成長とともに、部分的な都市計画の樹立と修正を重ね、1997年7月11日に

は計画区域1,143.110km²、計画人口150万人とした「2016年蔚山都市基本計画」が承認された。同時に蔚山が広域市へ昇格したことにより、2000年3月の「第2次蔚山都市計画」の再整備決定告示で、蔚山都市計画区域の内にある5つの面における都市計画区域では、地域別都市計画が弾力的に施行されるようになった。

今回とくに調査対象とした達洞（達里）周辺は、すでに1962年に都市計画区域に入っているが、区画整理の実施によって姿を大きく変えるのは、1980年代後半以降のことである。蔚山市作成の1988年修正1:5,000地形図によると、達洞周辺はまだ水田を中心とした耕地が広がり、土地の区画や道路もまだ整然としたものとはなっていない。しかし、現在の達洞は、高層ビルに囲まれた市街地となっていて、区画整理により道路も碁盤の目状に整備されている（写真5）。都市計画によって、わずか15年余りでこれだけの景観変化が生じたことは、まさに驚きと言える。

Ⅲ 蔚山の景観変貌

1 現在の蔚山に見る戦前景観の痕跡

蔚山は太和江下流部に開けた街で、旧市街地は左岸（北側）に、新市街地は右岸（南側）に形成されている。太和江右岸（南側）は、かつては水田地帯であったが、1980年代末以降に区画整理事業が進められ、現在はビルの立ち並ぶ市街地へと変貌し、市街地東部に位置する蔚山駅から西に伸びる三山路沿いは、ロッセ百貨店や現代百貨店などが立ち並ぶ商業地区となっている。また、市庁舎や公共機関の多くが新市街地に立地している。

洪沢らが訪れた時、ここは蔚山邑達里であったが、現在は蔚山市南区達洞となっていて、蔚山市の新都心を形成している。蔚山は、釜山と慶州との間に位置し、これらの町をつなぐ鉄道（東海南部線）が1935年に開通している。洪沢らが1936年にここを訪れた時には、この鉄道があったことになる。現在の東海南部線は、市街地を避ける形で線路が敷かれ、新市街地東方に蔚山駅が設けられているが、当時は、達里（達洞）の集落付近を鉄道が走り、達里駅が設けられていた。鉄道の移設は、近年のことで、都市計画に伴い1987年から1990年にかけて実施されたものである（蔚山市文化広報担当官室編1987：370-372）。

区画整理事業の実施によって、地上から線路跡を探すのは困難であるが、現地の1988年修正1:5,000地形図には移設前の鉄道線路が描かれ、2004年発行の1:5,000地籍図でも、一部に線路の区割りと見られる痕跡を見ることができた。これらの資料をもとに現地確認をしたところ、線路跡は、現在の蔚山工業高校（写真6・7）の脇にあることが分かった。ここは昭和初期、蔚山農業学校が所在したところで、今回の調査で「洪沢フィルム」の中に、その学校付近の写真もあることが確認された。写真8を見ると、手前には畑が広がっているが、奥に建物と広場らしきものが確認される。この建物は、当時の教員用官舎で、その左手が運動場であったという⁽¹⁾。写真9は、参考に現在の蔚山工業高校の運動場と校舎を、ほぼ同方向に撮影したものである。

また、鉄道の痕跡については、蔚山工業高校脇のビル（10階建てアパート）屋上からの眺めで確認することができた。写真10を見ると、碁盤の目状の区画の中に、斜めに走る境界線が見られる（写真右方）。このアパートの管理人によれば、この境がかつての線路の跡であり、このアパートの一部も



写真6 蔚山工業高校正門 (2005. 8.17筆者撮影)



写真7 蔚山工業高校構内案内図 (2005. 8.17筆者撮影)



写真8 蔚山農業学校付近の畑地（日本常民文化研究所所蔵：SA2096）



写真9 現在の蔚山工業高校校庭付近（2005.8.17筆者撮影）



写真10 旧達里駅付近の鉄道線路跡 (2005. 8 .17筆者撮影)



写真11 旧達里駅付近の古民家 (2005. 8 .17筆者撮影)

その旧線路上に建てられたという。ここは、旧達里駅付近と見られるが、たまたま、戦前建築の家屋が現在も飲食店として残っていた（写真11）。

2 写真に見る蔚山の景観変貌

現在の蔚山の達里一帯は、区画整理の実施とそれに伴う都市化によって、高層ビルに囲まれ、地上からかつての写真撮影位置を確認することはほとんどできない。そのため、撮影地から最も近いと思われるビルの屋上から俯瞰するという方法を探らざるを得なかった。

新市街地はここ数年、急速な商業地化が進み、ロッテグループの「ロッテ百貨店蔚山店」は2001年8月に開店し、その建物に連結した形で、翌2002年1月には「ロッテホテル」が開業している。このホテルは、同年開催の日韓ワールドカップサッカーに合わせて開業されたもので、蔚山にも試合会場の一つが建設された。また、ロッテ百貨店には、映画館を擁する「ロッテシネマ」と屋上に観覧車を設けた「マルチランド」が併設されている。また、現代グループのデパート「現代百貨店蔚山店」は、新市街地のメインストリートとなっている三山路を挟んで、ロッテ百貨店と筋向かいの位置にあり、ロッテ百貨店よりもやや早い時期に開店している。さらに、ロッテ百貨店西方約2kmの三山路沿いには、ロッテグループの大型スーパー「ロッテマート蔚山店」があり、日本と同様の広い駐車場を完備している。1階にはファストフード店が出店し、その一つに「ロッテリア」も出店している。

洪沢らが昭和初期に蔚山邑達里（達洞）を訪れた当時は、達里南西部の微高地には畑地が開けていて、大豆畑や麦畑が広がっていた。達里の「洪沢フィルム」には、周囲の景観をぐるりと撮影した連続写真がある（写真12, 14, 16, 18, 20）。この写真には、1936（昭和11）年8月の撮影で、達里の微高地にある集落の広場（madang）からの眺めであることが記録されている。1枚目の写真12には、「村で最も土地の高い所にある広場（madang）。然し一般に内庭をもMadangと称して居るので、特に区別する必要のある時は是をTajak-madang（打作庭）と称する。稲、麦の脱穀作業は主に此処で行なふ。土地は村有で、使用者は人夫一人につき高盛一升を洞に支払ふ由。」とあり、「洪沢フィルム」の中では珍しく比較的詳細な説明が加えられている。また、撮影順序として「東方より、南西→西→北西→北→北東の順に撮影」との記載がある。また2枚目の写真14には、「Madangでは今Poli（麦）の脱穀作業が行はれつつある。藁積みは既にカラサホ（Tollike）で打たれたもの、その前方にうづ高くなってゐるのは穂の部分で、これから篩ひ分けるのである。中央や、右の石はTol（石の意）で、時には麦をこれにたゝきつけて脱穀することもあるといふ。」との説明がある。3枚目の写真16には説明がなく、4枚目の写真18には「左方にはMadangの傍を南北に通る路が見える。そのつき当りは洞舎である。前方の畑は大豆とマツカ畑。」とある。最後の写真20には、「Madangより北東方を見る。」とだけ記録されている。これらを読むと「洪沢フィルム」の記録文には、民俗学的見地から見た、その場の意味や使用法なども含まれていることが分かる。

下段の写真13, 15, 17, 19, 21は、写真12, 14, 16, 18, 20とほぼ同方向を、最寄りのビル（10階建てアパート）屋上から撮影した現在の景観である。70年前の農村は、すっかり都会へと変貌し、かつての景観の痕跡を、今日、発見することは極めて難しい。撮影地点記録図のない中で、この写真撮影位置を確定するに当たって決め手となったのは、撮影地である「達里」の地名と、写真の方角記録、そして遠方の山並み（山稜地形）であった。字（里）レベルまでの地域の絞り込みが出来ていたため、昨年



写真12 達里の広場から西南方向（日本常民文化研究所所蔵：SA3885）



写真13 達洞から西南方向（2005. 8 .17筆者撮影）



写真14 達里の広場から西方向（日本常民文化研究所蔵：SA3885）



写真15 達洞から西方向（2005. 8. 17筆者撮影）



写真16 達里の広場から北西方向（日本常民文化研究所蔵：SA3885）



写真17 達洞から北西方向（2005. 8 .17筆者撮影）



写真18 達里の広場から北方向（日本常民文化研究所所蔵：SA3885）



写真19 達洞から北方向（2005. 8. 17筆者撮影）



写真20 達里の広場から北東方向（日本常民文化研究所蔵：SA3885）



写真21 達洞から北東方向（2005. 8 .17筆者撮影）



写真22 太和江とドッジル山（日本常民文化研究所蔵：SA2136）



写真23 工場とドッジル山（2004.9.10筆者撮影）

度の多島海での調査と同様の方法で、現地地形図により各山頂の方向を図上で割出し、地点決めを行った。遠方の山並みは、70年を経た今日もそう大きくは変化していないが、近景の地上風景は大きく様変わりし、もはや地上からでは遠方の風景が高層建築物に遮られて見えないため、最寄りのビルの屋上から観察を行なった訳である。

写真12・13の後方中央に見える山は、現在の新亭洞にある標高119mの隠月峰（南山）と見られる。また、写真14の後方中央部と、やや撮影方向がずれてはいるが写真15の後方右側及び写真17の後方左側に見える山は、現在の牛亭洞にある標高151mの無名峰、写真14の後方右端と写真17の後方中央部に見える山は、現在の聖安洞にある標高200mの含月山と見られる。写真20の後方山並みの手前左手に見える濃い山形と、写真21の同位置に見える山形は、鶴城洞にある標高59mの鶴城山である。いずれの景観も、70年を経て、広場・田畑と僅かな家並みの農村景観から、ビルの林立する都市景観へと変貌している。今日、山並み遮る形で林立する後方のビル群は、大半がアパートである。

最後の写真22・23は、達洞から3 kmほど東方に位置する太和江河口部の梅岩洞付近のものである。渋沢らは当時、太和江河口部を船で対岸に渡ったと見られ、太和江河口部の風景や船に乗っている写真がこの前後に5枚（SA2134～2138）写されている。写真の後方に写る小山は、標高90mのドッジル山と見られ、70年前は山際がすぐに太和江河口に接していたことが分かる。しかし現在は、河口部の一部は工場建設のために埋め立てられ、アルミニウム工場が立地し、太和江河口部及び蔚山湾周囲の工業化景観を象徴したものとなっている。

おわりに

本報告では、「渋沢フィルム」における景観写真の概要とその分析手法を述べ、昨年度、実現できなかった韓国・蔚山の都市化の経緯を踏まえた上で、70年前と現在の新旧写真により景観比較を試みた。今回の調査では、蔚山広域市の都市計画課及び南区文化院・西区文化院等の協力を得て、現地で大縮尺（1:5,000）の地籍図・地形図、都市計画図、古写真等の資料を閲覧することができた。しかし、独島（竹島）問題が表面化していた時期の訪韓であったこともあり、実際にはスムーズに調査が進まない場面もあった。韓国・蔚山の都市化に伴う景観変貌の過程を詳細に追うためには、現地の大縮尺の地図類を利用した分析が欠かせないが、これらの図面については韓国国外への持ち出しが認められなかったため、本稿では現地図面類の掲載ができず残念な結果に終わった。制約のある調査ながら、景観が激変している海外の「渋沢フィルム」撮影地における、70年前の地点特定と景観分析の方法について、今回得ることのできた若干の成果と今後の課題について、最後に述べることにしたい。

撮影地点の特定に当たっては、自然景観に依拠する部分が大変大きかった。昨年度の多島海における調査同様、山岳や河川といった景観の自然的要素は、景観が激変している蔚山においても、地点確定のための重要な手掛かりとなった。とくに蔚山では、周囲を囲む山並みは重要な要素となった。ただ、高層建築物に囲まれてしまったエリアでは、地上からの確認が困難であったため、ビルの屋上からの確定作業となり、同一視線での比較とならない点が難点であったと言える。また、一見、変貌してしまったと思われる景観の中にも、切り取られたかの形で残存する70年前の景観の痕跡を何地点かにおいて見ることができた。自然景観に比較して、文化景観の変容は極めて大きなものと言えるが、

今回の調査で、文化景観においても「変容」の一方で「残存」するものがあるとの確信を得た。今後の調査においても、景観の「変容と残存の対比」が重要になるものと思われる。

また、70年前という時代性を考えた場合、「渋沢フィルム」に記録された景観を読むに当たっては、幾つか留意すべき点がある。景観という視点から「渋沢フィルム」を眺めてみると、渋沢らのまなざしは、自然景観よりも文化景観あるいは生活文化に中心を置いた記録となっている。当時、植民地であった朝鮮半島を含む東アジア地域においては、集落景観や人物・道具などの中に日本と相違する生活文化を記録しようとする一方で、水田景観や麦畑・大豆畑の景観などの土地利用の中に、日本との類似性や共通点を見出だそうとする視線も見受けられる。つまり、「渋沢フィルム」の景観解析を行うためには、景観からいかにその地域の「文化性」を読み取って行くのが、大きなポイントとなる。

今回、調査対象とした韓国・蔚山における農村の工業化及び、土地区画整理に伴う人口急増と商業化という都市化へ歩みと景観の変貌ぶりは、筆者が長年フィールドとしてきた国内の神奈川県・相模原と共通点や類似点が多い。今後は、国外の「渋沢フィルム」に記録された景観を、国内各所の景観変貌と比較してみる必要性もあると考える。また2005年4月には、景観法が施行されるとともに、文化財保護法改正によって文化財に「文化的景観」が加えられ、国内では景観ブームを迎えている。今後は、近年のさまざまな景観論議を検討した中で、「渋沢フィルム」を景観的観点から改めて見直すことも必要である。

謝 辞

調査にあたりお世話になった、蔚山広域市の韓国演劇協会蔚山支部事務局長・鄭在和氏、南区文化院院長・金松泰氏、中区文化院事務局長・金成太氏、都市計画課長・金正成氏、同課員・鄭大基氏をはじめとする現地の方々並びに、現地調査への同行及びハングル文献の翻訳に協力頂いた筑波大学大学院生・季虎相氏、さらに「渋沢フィルム」の利用にあたりご配慮頂いた窪田涼子氏をはじめとする日本常民文化研究所の皆様には厚くお礼申し上げます次第である。

注

(1) 蔚山広域市南区文化院院長・金松泰氏のご教示による。

参考文献

八久保厚志・須山聡

2004「渋沢フィルムの図像解析とその応用」本COE年報1：105-125。

浜田弘明

2004「『渋沢フィルム』の景観分析とその課題-朝鮮半島多島海を事例として-」本COE年報2：74-93。

浜田弘明・八久保厚志

2004「写真資料と景観変容-渋沢フィルムの分析に向けて-」本COE調査研究資料1：127-159。

香月洋一郎

2003「環境と景観の資料化と体系化」本COEニューズレター1：11-12。

長岡源次兵衛編

1916『蔚山案内』蔚山郡、韓国国立中央図書館所蔵。

蔚山大学都市・建築研究所編

2003「蔚山地域の沿革と概要」『蔚山近代文化遺産目録』蔚山広域市.

蔚山広域市史編纂委員会編

2002『蔚山広域市史』蔚山広域市.

蔚山市文化広報担当官室編

1987『蔚山市史』蔚山市.